

## Fukushima : Hope and Despair

福島原発の悲劇的な事故からの 10 年を振り返る・吉田繁展

日本の写真作家・吉田繁による“Border -for a Prayer”(2012 年～)と“The Sea Wall -hope and despair-”(2019 年～) の 2 つのプロジェクトから 48 枚の作品とビデオ 4 作品を展示します。

2021 年 3 月 11 日は東日本大震災からちょうど 10 年になります。地震による津波は東北地方の東海岸を襲いました。2 万人以上が亡くなり、数十万人が移住を余儀なくされました。そして、多くの人の日常生活は突然崩壊しました。

吉田繁はこの悲劇的な災害に深くショックを受けた多くの人の一人でした。彼は被災地に行けるようになるとすぐにそこを訪ねました。このときまで彼は 20 年以上の間、広告および雑誌の写真家として活動していましたが、彼が被災地で見たものは彼の人生を永遠に変えました。

「被災地を訪れたとき、たくさんの人が海に向かって祈っているのを見て心が震えました。海は多くの命を奪ったにもかかわらず、彼らはその海を恨むことなく祈りを捧げていたのです。それは祈ることによって悲しみを消化して希望に変えていこうとしているようにも見えました。その時、私は“Border -for a Prayer”を始めようと思いました。私自身が犠牲者を救ったり助けたりすることはできない。でも、彼らの祈りを込めた作品をつくることによって、小さな石を水に投げ入れてたくさんの波紋を作ることができるように、誰かの心を穏やかに、あるいは元気にできるかもしれない。そう考えたのです。祈りの隠されたエネルギーを写真で伝える試みでもあります」

このプロジェクトでは吉田繁はカメラのシャッタースピードを 1 分にしています。これは残された人々の祈りの時間に相当します。祈りの時間と同じ時間をかけて撮られた写真でもあるのです。そうして彼は 10 年間海岸を訪れ、人々の生活の変化を観察し、プロジェクトを遂行してきました。

2019 年からは吉田繁は、津波の被害を防ぐために建設され始めた防潮堤をとらえた 2 番目のプロジェクトを開始しました。日本政府は将来の災害を防ぐために、海岸沿いに高さ 15 m、長さ 400km の壁を建設することを決定しました。それにより人と自然の調和のとれた共存はできなくなり、その代わりに地元の人々は安全を手に入れられると言われました。つまり、海との分断の代償として安全を選ばされた形です。地元の人々はもはや美しい海の風景を楽しむことができず、代わりにコンクリートの壁を見ることになりました。それは希望なのか絶望なのか。どちらの象徴であるかを吉田繁は問いかけています。

展覧会キュレーターのアンドレイ・マルティノフ。

著者について：

吉田繁。1958 年東京で生まれ。彼の作品は日本、ロシア、イタリア、アメリカで展示されました。2012 年、SAMURAI FOTO(Photographers Association)を設立。https://clck.ru/SSiDo

メディアパートナー：国際交流基金